

香取遺産

vol. 134

— 下小野塚群 —

「発掘された中近世の塚」

今から30年前、市道の拡幅工事により2基の塚が発掘調査されました。

この塚は、佐原の市街地から東南へ約5・6kmの台地上、下小野字中宿地先にありました。初めは2基の古墳と思われるでしたが、発掘調査が進むにつれ、方形の周溝を巡らせた塚であることが判明しました。

2基の塚は「ひさご塚」と「丸塚」と呼ばれていたもので、ひさご塚は一辺11・6m、墳丘の高さは1・25m、丸塚は東西14・5m、南北11・5m、墳丘の高さは1・9mほどの規模でした。

塚に伴う遺物としては、ひさご塚からは宋銭の「元符通寶」1枚、丸塚からは明銭の「永楽通寶」1枚が出土したのみでした。埋葬施設を伴わないことから、中世から近世にかけて築造された信仰上の塚と考えられます。

現在も、下小野地先には、墳丘を持つ遺構が多く残されています。千葉県埋蔵文化財分布地図によると、字遠原に所在する「遠原古墳」、字新林に所在する「下小野新林古墳」、字松山に所在する「下小野松山古墳」、字一本松に所在する「下小野助塚古墳」、その他にも個々の名前はついていませんが、これらを包括して「下小野塚群」として分布地図に掲載されています。

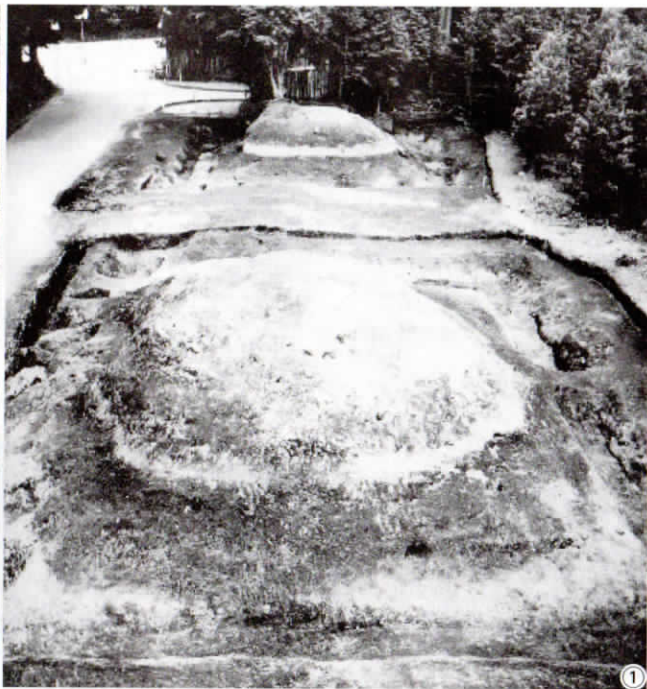
ています。

下小野の有志によって刊行された「下小野郷土史」によると、遠原古墳付近の道路沿いには「八ツ塚」といわれ、数多くの塚が並んでいたと紹介しています。このことと、ひさご塚・丸塚の調査結果を踏まえると、遠原古墳一帯は、中世から近世にかけて、信仰上の目的で造られた「十三塚」の遺構ではないかと考えることができます。

下小野地区は、昭和34年(1959)～昭和42年(1967)の明治大学による現地調査によって、寛文～延宝年間(1661～1681)に、北側の台地先端から現在の地に集落の移動が行われたことが知られています。これらの塚群も、古代から近世にかけて連続と続く下小野の歴史の証であるといえるでしょう。

生涯学習課

☎5012224



②

③



①奥が「ひさご塚」、手前が「丸塚」 ②下小野松山古墳 ③庚申塚

